

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02058

研究課題名(和文)シカゴ学派社会学における観察する/観察される女性：女性によるモノグラフの分析から

研究課題名(英文)Women in Chicago School Sociology: An Analysis of Monographs written by Women

研究代表者

酒井 千絵 (Sakai, Chie)

関西大学・社会学部・教授

研究者番号：30510680

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、19世紀末から20世紀前半のシカゴ学派社会学が、どのように女性の行動や逸脱を通して社会問題を記述してきたのかを明らかにすること、また女性自身が社会を分析し、記述する研究の重要性を掘り起こすことを目的に、シカゴ大学社会学部が行った研究をジェンダーの視点から問い直すものである。また、シカゴ学派社会学の事例をとおして、現代日本における女性の仕事と葛藤を調査、分析した。これらの調査研究を通して、女性が社会的調査の対象としてだけでなく、社会を記述、分析し、社会問題に対して能動的に活動してきたことが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会学史が男性による調査研究や議論を中心に組み立てられる傾向が強い中、女性による研究や社会活動に注目することで、20世紀初頭の社会学の中で、女性が活発な役割を果たしたことが明らかになった。また、女性の雇用や社会活動が果たした役割を、女性の研究者による学術研究や社会实践には、新たな視点からの社会貢献の可能性のあることを、当時の資料や現在の先行研究を通して示すことができた。

研究成果の概要(英文)：This study aims to clarify how the Chicago School of Sociology in the late 19th and early 20th centuries described social issues through women's actions and deviance and to uncover the importance of research in which women themselves analyze and describe society, by reexamining the study conducted by the University of Chicago Sociology Department from a gender perspective. This project also aims to rethink the case of the Chicago School of Sociology from a gender perspective. In addition, through the Chicago School of Sociology case study, we investigated and analyzed women's work and conflicts in contemporary Japan. Through these studies, it became clear that women have been actively describing and analyzing society and social issues, not only as objects of sociological investigation.

研究分野：社会学

キーワード：ジェンダー 社会学史 雇用 シカゴ

1. 研究開始当初の背景

研究当初の問題関心は、19世紀末から20世紀前半のシカゴ学派社会学が、どのように女性の行動や逸脱を通して社会問題を記述してきたのかを明らかにすること、また女性自身が社会を分析し、記述する研究の重要性を掘り起こすことであった。アメリカ初の社会学部を擁したシカゴ大学で研究や調査を行った研究者とそのネットワークは、「シカゴ学派社会学」と呼ばれ、20世紀後半以降、アメリカだけでなく、ヨーロッパや日本でも関心の対象となってきた。都市とそこで生じる様々な関係や問題を、丁寧なフィールドワークで明らかにするシカゴ学派社会学の手法と成果は、私たちが現代社会を理解するためのヒントを与えてくれる。

改めてこれらの成果を手にとると、当時のモノグラフに、女性が思った以上に数多く登場することに気づかされる。20世紀当時のシカゴは、都市化、産業化が進むアメリカの中でも特に急速で劇的な社会変動を経験した都市であり、19世紀末には、人口の大半が移民あるいは移民の子どもで構成されるという特異な場所だった。国内外から流入した人口には女性も多く、工場労働や店舗やレストランでのサービス業で働く女性も多かった。しかし女性の賃金は男性よりも低く、女性の貧困や搾取、家族内での働き方、セクシュアリティとその逸脱などが、女性の直面していた問題として描かれたが、調査研究する側は主に男性であった。シカゴ大学社会学部の初期には、ジェーン・アダムスらが1889年に設立したハル・ハウスが、貧しい移民や労働者の生活を支援するだけでなく、都市の現状に関する大規模調査を行い、報告書を作成し、社会学の基礎をつくった。しかし、現在はハル・ハウスの活動は社会福祉の文脈で取り上げられることが多い。またシカゴ大学は当時としてはまれな男女共学の大学であり、社会学部には多くの女性が学んでいた。シカゴ学派社会学でもルース・S・キャバンなど女性研究者もいるが、女性であることに焦点を合わせた記述はほとんどみられなかった。

2. 研究の目的

研究の主な目的は、女性が書き手となった社会学的モノグラフに注目し、男性の研究と対象の選択や分析内容の相違を明らかにすることであった。女性の社会的役割は男性と比べて限定されていたが、多くの女性が社会的現実の理解と記述に貢献したという事実は、十分に評価されてこなかった。そのため、女性がどのように当時の社会に問題を見だし、研究を行ったのかという点から、当時のシカゴの状況を捉え直すことが当初の目的だった。

2019年から開始した本研究は、2020年のコロナ禍の影響を受け、国外での調査計画を見直さざるを得なかった。シカゴ学派社会学における女性という関心対象を日本に移し、現代日本における女性の働き方と葛藤を、日本国内で企業に勤務する女性に対して調査を行った。その過程で、シカゴ社会学の事例を、日本の社会学における女性の貢献や、社会が変動する中で女性が果たす役割の考察に広げていくという方向に研究計画を拡大した。

3. 研究の方法

具体的な資料として、公刊されたモノグラフに加え、シカゴ大学図書館特別コレクションに残されている調査データの一部や関係者が交わした通信、当時の社会状況を示す歴史資料を併せて分析した。資料の収集と分析にあたっては、記述された社会現象自体に注目するだけでなく、様々な社会変動の中で何が研究対象として選ばれ、どのような観点から分析されたのかに注目した。

日本国内の事例については、以前の研究で日本から海外へ移住して働く女性に対して行ったのと同様、ライフストーリー・インタビューを用い、収集したデータを分析した。また、現代日本における女性の雇用に関する先行研究に対して、女性研究者の着眼点や結論に、対象と性別を共有していることからくる特徴があるのかという関心から分析を行った。

4. 研究成果

シカゴ学派社会学における女性の貢献については、コロナ禍により2020年から2022年まで渡米することができず、調査・資料収集を行う上で大きな制約があった。そのため、当初の計画通り、研究成果を挙げることは難しかった。成果としては以下の2点をあげる。

(1)シカゴ大学の正規学生ではなかったものの、R・パークの指導を受けてシカゴで参与観察を用いた調査を行って研究所を出版したF・ドノヴァンの著作や資料を分析した。特に、ドノヴァンがはじめて出版した書籍である「給仕する女(The Woman Who Waits)」は全体を邦訳し、出版などによる公開の可能性を探っている。また、2023年にはシカゴを訪れ、シカゴ大学図書館とシカゴ歴史博物館で、ハルハウスやSchool of Civics and Philanthropy (1903-1920)に関する資料を収集した。資料収集が遅れたため、現在分析を開始したところだが、ハル・ハウスやSchool

of Civics and Philanthropy が、当時のシカゴの有力者と強い関係を築いて資金集めを行い、ハルハウスをはじめとする実践的なソーシャルワークを現場としたフィールドワークを含む活発な活動を行っていたことが明らかになった。こうした資料を用い、今後論文や書籍として発表を進めていく。

(2)日本国内の女性の働き方について、製造業に勤務する女性社員や結婚や出産などのライフイベントを経た女性が、仕事は継続しやすくなり、育休復帰後も自分の専門性を生かした仕事に就けているにもかかわらず、昇進の機会や職場内で重要と見なされている仕事に就きにくい理由を明らかにした。これまで、女性の管理職割合が伸びない理由として、女性が育児休業取得後に定型的な仕事・補佐的な仕事に割り当てられていることが指摘されてきたが、調査では、育児休業から復帰後も、非定型的な仕事、自分の裁量ですすめる仕事に就くようになっていくことが明らかになった。にもかかわらず、やはり女性にとって昇進の可能性が低い理由として、育児などのケア労働が女性の役割に固定されていること、職場内で重要とされている仕事は、単に非定型的、創造的であるだけでなく、チームでの作業や予定外の超過勤務を伴うこと、そのため、短時間勤務を取得し、残業を制限している女性が入りにくいことが示唆された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 Sakai Chie | 4. 巻 33 |
| 2. 論文標題 Has globalization of the Japanese economy contributed to satisfying career building for women? The case of Japanese female migrants to East Asia | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 Japanese Journal of Sociology | 6. 最初と最後の頁 58 ~ 75 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1111/ijjs.12164 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

| |
|---|
| 1. 発表者名 Chie Sakai |
| 2. 発表標題 The Sociologist Who Waits: Frances Donovan and Her Contribution to the Chicago School of Sociology |
| 3. 学会等名 ISA Forum of Sociology（国際学会） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Chie Sakai |
| 2. 発表標題 Women's Conflict with a Promotion in the Manufacturing Industry in Japan |
| 3. 学会等名 XX ISA World Congress of Sociology（国際学会） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---------------------------|
| 1. 発表者名 酒井千絵 |
| 2. 発表標題 女性にとっての両立支援と昇進 |
| 3. 学会等名 関西社会学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計2件

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Sylvain Beck, Abdoulaye Gueye, Milos; Debnar, Julia Buchele, Chie Sakai, Omar Lisarraga, Clio Chaveneau, Karine Duplan | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 Brill | 5. 総ページ数 190 |
| 3. 書名 Expatriation and Migration: Two Faces of the Same Coin | |

| | |
|--------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 間淵領吾・酒井千絵・古川誠編 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 世界思想社 | 5. 総ページ数 272 |
| 3. 書名 基礎社会学〔新訂第5版〕 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|